

メキシコ・メディア教材プロジェクト（一）

外国語学部 スペイン語学科3年 鹿熊 あずさ

今年、後藤ゼミナールでは、メディア教材プロジェクトの題材として、「メキシコ」を選んだ。一昨年の「コスタリカ」、昨年の「キューバ」に続いて第3弾となる今回のプロジェクトの題は、「メキシコの二つの顔——光と陰——」である。光と陰とは一体何なのか。それを知るために、4月から、まずはメキシコについての勉強が始まった。

メキシコを知ることが、この国の光と陰を明らかにすることに繋がる。そう考え、私たちが調べたことは多岐にわたる。メキシコの歴史、労働状況、環境、先住民、産業、貿易、ストリートチルドレン、貧困問題など。それぞれを分担し、各自が責任をもって調べ、発表、質疑応答、意見交換を8月のゼミ合宿まで繰り返し行った。そうして見えてきたものが、近代化に

よって、どんどん発展し、豊かになっていくメキシコの姿である。高級住宅街、ショッピングモール、1994年にアメリカ・カナダ・メキシコの3カ国で結ばれたNAFTA（北米自由貿易協定）、それによってメキシコに進出してきた外国企業のオフィス、高級車が進出してきた。しかし一方で、近代化の波に飲み込まれ、それに取り残されていくメキシコ。街の至る所で目にする露店、靴磨き、スラム、貧困問題、ストリートチルドレン。それがメキシコの光と陰であった。

9月に入り、いよいよ現地取材へ。事前にグループ分けをし、各グループで何を取材し、撮影するかは決めてあったので、ほとんどがグループ行動だった。もちろん我々日本人だけではあまりに危険なので、メキシコ人のコーディネーターが各グループにつき、安全を確保しながら取材を行った。

ネーターが各グループに一人ずつ付いた。私たちのグループは主にメキシコの近代化を担当。そのため、撮影した場所のほとんどが、貧困などのそういった陰の部分とはかけ離れたところばかりで、思わず陰の部分忘れてしまうこともあった。撮影に行ったサンタ・フェという街は、メキシコ・シテイから車で30分くらいの街で、如何にもといった感じの高級住宅街があり、外国企業のオフィスビルが立ち並び、大きなショッピングモールがあり、その中には高級ブティックが入っていて、駐車場には高級車も並んでいた。当然、物売りをする人も、靴磨きをする人もいない。シテイの騒然とした様子とは打って変わって、閑静な雰囲気を感じて出していた。人々の身だしなみもきちんとしていて、メキシコの光の部分象徴するような街だった。

メキシコに来て印象的だったのが、人々の表情だ。私が持っていたイメージは、物売りとか靴磨きをしている人々、つまりは陰の部分に属してしまふ人々の表情は当然、暗いものだと、そう思っていた。春にスペインに行ったとき、街には物乞いをする人がいた。その人たちは決まらず「Soy pobre, por favor ayúdame.（スペイン語で）『私は貧しい、助けてください』』と言っていた。その顔にももちろん笑顔はなかった。その印象が強く、メキシコはいわゆる発展途上国。「自分は不幸だ」と思っている人は「不幸」という表情をしていると思っていた。しかし、実際に行ってみると、そんな表情をしている人はいなかった。むしろ明るいと言ってもいい表情を浮かべていた。自分の生活を不幸だと思っている人はいないと思えるほどだった。確かに彼らは貧しい生活をしている。だが、それを誰かのせいにするとかではなく、自分たちの力でどうにかしようとする。誰かの手を借りて立ち上がるのではなく、自力で立ち上がるうとする。それはメキシコ人の強みなのか。歴史が彼らをそうさせるのか。

メキシコは300年もの長い年月をスペインに支配されてきた。しかしメキシコ人は立ち上がり、独立を果たす。それは誰かの力を借りるのではなく、メキシコ人自身が起こしたことであった。独立後も、フランスによって帝政にされたも、ディアスの独裁政権が起きても、彼らは自分たちの力でメキシコをよりよいほうへ導こうと運動を起こした。そうした度重なる運動で、メキシコ人には自分たちが国を変える、自分たちがこそが国であるといった意識を培っていったと思う。そしてそれは今でも変わらない。私たちがメキシコに行った今年（2006年）は、6年に一度の大統領選挙の年だった。今年の大統領選挙は波乱を極めた。フォックス大統領の後継者、カルデロン候補に不正投票があったと言われ、対するオブラドール派は選挙管理委員にそれを訴え、票の数えなおが行われたが、結果は変わらず、カルデロンが勝利。それに納得がいかないオブラドール派は、首都、つまりメキシコ・シテイの主要道路を占拠し、デモテントが張られた。私たちが泊まったホテルの前の道路も占拠されていた。いつ暴動が起きてもおかしくない状態だった。日本では決してありえないことだ。政治に対して、ここまで行動を起こすなどということは日本ではまずない。自分が支持した人が落選しても、反対デモを起こし、道を占拠するなんてこともまず起こりえない。そもそも日本人は政治に関心がない

のではない。メキシコはあたかも、国民全員が政治に関心を持っているかのように見えた。投票率が98%。有権者のほとんどが、国のリーダーを決める選挙に参加する。メキシコ人は自分の国をここまで想っているのか、と思った。自分たちの時代によくならなくても、子供や孫の時代、その先の未来を思ってここまで行動する。これは彼らの先祖から続いてきたことで、それは彼らの誇りだろう。この誇りがメキシコの財産なのである。今はまだ小さなメキシコでも、いずれこの誇りが彼らを強く、大きくする。そう思えた。

UNAMという国立大学に取材をしに行き、何人かの学生に、先日選挙についてと、メキシコの将来について質問してみた。仮に私がこの質問をされたら、二言三言で終わってしまう。しかし学生たちは、おかしな表現かもしれないが、すらすらと答えてくれた。二言三言で終わる学生は誰一人としていなかった。彼ら一人ひとりが自分の考えを持っていて、周りの意見に流されていない。同じ大学生なのに……というのが正直な感想だった。

ストリートチルドレンに関しては、私は取材に行っていないので多くは書けないが、NGOなどの団体が一生懸命になって彼らのために動

いているそうだ。なかなか改善に向かわないのが現状だが、諦めることはない。悪条件でも諦めないのがメキシコ人。諦めないで戦って、解決する。どれだけ時間がかかっても、解決する。そういう国がメキシコだと少し思えた。

また世界的バイオリニストである、黒沼ユリコさんにも取材をすることが出来た。黒沼さんは現在メキシコ・シティでバイオリン教室を開いているのだが、以前はインディヘナ、いわゆる先住民の村に暮らしていたそうだ。メキシコではインディヘナに対する差別問題もまだ残っており、彼らが村の地主によって虐殺されてしまったということもしばしばあったそうだ。それは今でも、表面化していないだけで、起こっているという。先住民の問題も、ストリートチルドレンと同様、時間をかけて解決していかねければならない問題だ。黒沼さんのバイオリン教室では、お金持ちの子も貧しい子でも、バイオリンが本当に大好きでやりたい、という子が通っている。実際に練習風景を見学させていたのだが、どの子も表情は真剣そのものだった。見た目で言えば、肌が白い子も黒い子もいた。日本で言う「同じ釜の飯を食った仲」ではないが、肌の色や貧富の差を越えた環境で一緒に何かを学んでいく、というのは彼らの将来に大き

な影響を与えることは間違いないだろう。

今回、メキシコを題材にし、勉強し、実際に現地で色々なものを見て、多くの人に話を聞くことで、ほんの一部ではあるがメキシコという国を知ることが出来た。

「メキシコの二つの顔―光と陰―」は単にこの国のプラス面（光）とマイナス面（陰）のことを表しているのではなく、光の中にも陰は存在し、陰の中にも光は存在するということ。そして今はまだ、富裕層、貧困層、そしてインディヘナの考えがばらばらなメキシコ。これらの考えが1つになったとき、メキシコはまた大きな1歩を踏み出せるのではないだろうか。

最後に、このメディア教材プロジェクト「メキシコの二つの顔―光と陰―」によって、多くの人がメキシコに関心を抱き、この国について考えてくれたら嬉しく思う。